

徳川三代

将軍の逆襲編

家光の野望

霧島那智



歴史連続シミュレーション

江戸幕府、家光あやうし！

北の独眼竜、謎の武蔵、復讐の豊臣家…

青春出版

読者のみなさんへ

この本をお読みになって、特に感銘をもたれたところや、ご不満のあるところなど、忌憚のないご意見を当編集部あてにお送りください。

また、わたくしどもでは、みなさんの斬新なアイデアをお聞きしたいと思っています。

「私のアイディア」を生かしたいとお思いの方は、どしどしお寄せください。これからの企画にできるだけ反映させていきたいと考えています。

なお、採用の分には、記念品を贈呈させていただきます。

青春出版社 編集部

しょうぐん ぎやくしゅう へん
将軍の逆襲 編
とくがわさんだい いえみつ や ぼう
徳川三代 家光の野望

プレイブックス
PLAYBOOKS

2000年9月10日 第1刷

著 者 きりしま なち
霧 島 那 智

発行者 小澤源太郎

発行所 東京都新宿区 株式会社 青春出版社
若松町12番1号
☎162-0056

電話 編集部 03(3203)5123 振替番号 00190-7-98602
営業部 03(3207)1916

印刷・錦明印刷 製本・誠幸堂

ISBN 4-413-01809-5

©Nachi Kirishima 2000 Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写(コピー)することは著作権法上認められている場合を除き、禁じられています。

軍の逆襲編
徳川三代

家光の野望

江苏工业学院图书馆
藏书章

霧島那智

プレイブックス
PLAYBOOKS

徳川三代 家光の野望 ● 目次

第一章 幕府軍・忠長、

榛名山麓に惨敗を喫す

13

第二章 將軍・家光、

忠長の悲報に接し激怒

39

第三章 独眼竜・伊達政宗、

ついに重い腰を上げる

61

第四章 伊達軍、怒濤の勢いで

会津に進撃開始

85

第五章 水戸宰相・頼房、

伊達政宗の知略に煙に巻かれる

107

第六章 幕府についた宇喜多秀家、

三國峠を強行突破

127

第七章 緊迫の東北・北陸情勢、

家光の決断を迷わす

151

第八章 秀家、

関ヶ原の老将・福島正則と密談

171

第九章 あの川中島の古戦場に、

東西両軍が対峙す

191

第十章 十数万の大軍が激突！

「川中島の合戦」へ……

213

カバーイラスト 若菜等＋Ki

本文図版作成 フジマツクオオフィス

「家光の野望 將軍の逆襲編」までの流れ

元和九年（一六二三年）の秋、発足してから間もない徳川幕府の屋台骨を揺るがす一大事件が勃発した。

徳川御三家の第一である尾張家の藩主・義直よしなおとその第二である紀伊家の藩主・頼宣よりのぶが結託し、飛驒高山に幽閉中の兄・忠輝ただてるを味方に引き入れた上で、「謀反むほんの旗揚げ」をしたのである。

第二代將軍・秀忠ひでただは、家康が死ぬや、弟の忠輝を取り潰つぶして伊勢朝熊あさまに配流したり、兄・結城秀康ゆうき ひでやすの嫡子ちやくしである松平忠直を取り潰して豊後萩原に配流するなどの信じがたい行動に出た。秀忠は、嫡子・家光いえみつの行く末を案じるあまり、將軍位を奪取さくしゆされることを危惧きぐし、徳川一門で有能な者を、狙い撃ちなんくせにし、難癖なんくせを付けて取り潰す行動に出たのである。これに対し頼宣と義直は周到に「秀忠暗殺」の準備を重ね、將軍位が秀忠から家光に譲られる瞬間を狙って事を起こした。

徳川幕府第三代將軍の宣下せんげを受けた家光は先に江戸に帰城し、大御所の座に退いた秀忠

は閏八月二十一日（陽曆十月十五日）に京を進發した。

この秀忠一行を、尾紀兩軍は、桑名から宮に渡る、七里の渡しで海陸から呼应して挟撃したのである。

秀忠一行は一応の武装はしていたものの、絶対に秀忠を討ち取ろうと、肚を据えてかかつてきた尾紀兩軍の猛攻を、凌げるはずもなかった。秀忠は「もはや、これまで」と庄内川畔で自害し、尾紀兩軍はただちに東海道を江戸方面に急ぎ東進させた。

その頃、忠輝も配流地の飛驒から越前の地に潜入を果たし、謀反の旗揚げのために根回しを充分に行なっていた。

七里の渡しでの秀忠暗殺と呼応して越前北ノ庄で旗揚げした忠輝軍は、たちまち旧臣たちも糾合して二万もの軍勢となった。さらに尾張軍の支援別働隊も加え、近隣の諸大名も馳せ参じて、五万二千の大軍に膨脹した忠輝軍は、一路、中山道を東進した。

一方、七万五千の尾紀兩軍は、アツという間に箱根の関所を落として芦ノ湖の東岸に布陣した。そして、そのまま尾張軍は箱根を固め、紀伊軍は籠坂峠を越えて甲斐方面に転進し、甲州街道の要衝である賑岡（現在の犬伏）を押さえたのである。

東海道、甲州街道、中山道という、関東から西側の主要街道をすべて封鎖し、徳川幕府

を経済的に孤立させる。これが、忠輝・義直・頼宣の三兄弟の基本作戦であつた。

家光新政権となつた徳川幕府を武力で打倒する気は、三兄弟にはない。徹底して戦えば倒せるだろうが、それでは両軍の激突ではなはだしく損耗し、共倒れとなる可能性があつた。もし、そうなれば、伊達・上杉・毛利・島津・加藤などの、反徳川勢力に政権を奪取される事態を招きかねない。「徳川政権を未来永劫に存続させる」が三兄弟の旗揚げの大目的であるから、そうなつては本末転倒である。

そこで尾紀軍は、容易には攻め上れない交通の要衝に布陣した段階で、行軍を止めたのである。

しかし、江戸城にいる家光・忠長の兄弟には、この意図が分からない。

関ヶ原の合戦をはるかに上回る徳川家の危機に、家光・忠長は焦燥を深めた。もしも謀反軍に有力外様大名までもが加わるような事態になったら、もはや幕府は一卷の終わりである。そうした事態を防ぐために、家光・忠長の兄弟は急ぎ軍備を整えるのと同時に、様々な政略を打ち出した。

まず、東北の雄、仙台の六十二万五千石の伊達家への対策であつた。

陸奥中納言・伊達政宗はすでに六十三歳の高齢であるが、独眼竜の異名どおり、今

も壮健である。越前北ノ庄で旗揚げした松平忠輝は政宗の女婿であったが、取り潰しによつて幕府は政宗の愛娘・五郎八姫いろはと忠輝の仲を引き裂いていた。だから余計に伊達家は、謀反軍に荷担して東北で旗揚げする可能性が高く、それを阻止するためには、よほどの好条件の提示が必要であつた。

政宗が、はるばるヨーロッパに家臣の支倉常長はせくらを派遣し、スペインと軍事同盟を結ぼうと企図したことは記憶に新しい。この政宗の画期的な壮挙を、幕府は鎖国令を楯たてに潰してゐた。ここで伊達家を味方に付けるためには、政宗の希望を、ほとんど丸呑みに受け入れなければならぬであらう。

また、五郎八姫が敬虔けいけんな切支丹キリシタンであるのも周知の事実であつた。切支丹弾圧という幕府の基本政策の下で五郎八姫が無事でいられる理由は、ひとえに政宗の愛娘まなむすめだからで、いわば黙認である。これを一歩進めて、切支丹信仰を容認する。さらに、伊達家が独自にスペインなどのヨーロッパの列強国と軍事外交同盟を結ぶ権利も認める……。

要するに伊達家を、徳川幕府の大名でありながら、仙台という、独立国しんりつこくとしても承認するといふ苦肉の策である。こういった条件を家光の親書にしたためた急使が、急ぎしらかわのせき白河関を越えて、仙台の地に旅立つた。

次いで、外様大名では最大の、加賀の前田家であつた。

毛利家や島津家は遠いが、前田家は近く、しかも開祖・利家は豊臣秀吉の第一の盟友であり、豊臣政権を支えた人物である。利家が死ぬまで、家康も前田家を恐れて、関ヶ原の合戦も大坂の陣も起こせなかつたほどののだ。

現在の前田家の当主は利家の四男・利常で、その正室は、家光の姉・珠姫であつたが、あいにくなことに、珠姫は病死してゐた。その分、幕府と前田家の関係は稀薄になつてゐる……。だが、ここに、たった一つ、希望の糸が存在した。

前田家には利常の姉・豪姫が健在だったのである。豪姫は、利家の四女で、豊臣政権五大老の一人であつた備前中納言・宇喜多秀家の許に嫁して二男一女を儲けた。宇喜多秀家は関ヶ原の合戦で敗れ、二人の息子と共に八丈島に流されたが、現在もまだ、五十二歳で健在である。豪姫から見れば、徳川家は夫や息子たちと引き裂いた憎い仇であるから、ここで、思い切つて秀家を赦免し、豪姫との仲を取り持つのだ。

それのみならず、謀反軍鎮圧に成功した暁には、宇喜多家を大大名として再興させることも確約する。秀家は関ヶ原の合戦で敗れはしたもの、それまでは凄まじい合戦ぶりの猛将として全国に名を知られてゐた。そういう秀家が幕府軍に加わってくれば、豪姫は

弟の利常を説得し、前田家が味方に付いてくれる可能性は大きくなる。

そこで幕府は、八丈島に迎えの船を出すと同時に、金沢の豪姫の許には宇喜多家の再興を認める趣旨の急使を送ったのである。

しかし、將軍・家光の謀略は、すべては後手後手になっていた……。伊達家からの返事も来ず、八丈島から宇喜多秀家も到着しないうちに、「徳川家の内戦」が始まってしまったのである。

そこで幕府軍の別働隊を率いる忠長が、碓氷峠^{うすい}に布陣する忠輝軍を撃破しようと、沼田城主・真田信吉の道案内で鳥居峠を越えて信濃に出る経路をとって行軍した。

ところが、この作戦は完全に忠輝軍に見抜かれていた！

忠長軍は鳥川沿いの草津街道で、見通しのきかない地形を利用して密かに二度上峠^{ひそ}から下ってきた忠輝軍に突入され、不意を衝かれたことで収拾不能の四分五裂状態に陥ってしまったのである……。

第一章

幕府軍・忠長、

榛名山麓に惨敗を喫す

追いつめられる幕府軍

新將軍・家光が全幅の信賴を置く実弟・忠長の率^{ひき}いる幕府軍は、烏淵^{からすぶち}（倉淵）付近の草津街道を北上していた。

そして、夜明けを迎えたばかりのところで、左手横合いの二度上峠方向から攻め下つてきた謀反軍——松平忠輝軍に突入されたのである。

このあたりは狭く、せいぜい二列ぐらいの縦隊にしかねない。

必然的に長蛇の列になつていた幕府軍は横腹^{えぐ}を抉られるような格好になり、ひとたまりもなく崩壊した。

「敵襲じゃっ！ 敵襲じゃっ！ 中納言様の御身をお守り奉れっ！」

忠長の旗本たちは忠輝軍の奇襲^{ろうばい}に狼狽^{ろうばい}しつつ、何とか忠長の周囲に守備陣を形成しようと努めた。

だが、局部的には圧倒的に忠輝軍のほうが多い。

そのために崩壊の度合のほう^{すさ}が凄まじく、どうにもならない。

これが家康の時代であれば、三方原合戦や姉川合戦などの戦史に残る激戦を経験した猛者が残っている。

これだけ不利な状況でも狼狽せず、辛うじて踏み止まったかもしれない。しかし、そうした猛者がいないために、圧倒的に形勢不利な状況では全く踏ん張りが利かなかった。

総大将の自分が討たれるわけにはいかないと、忠長は馬に鞭くれ、右手の榛名山の麓に広がる森林地帯に躍り込んでいった。

鬱蒼たる原生林は全く見通しが利かず、その中に逃げ込めば容易に姿をくらませそうに、忠長には思えた。

数名の旗本たちが忠長の身辺を守り抜こうと、背後に扇状に固まりつつ、やはり鞭くれて続く。

森林の中に駆け込んだことで、たちまち榛名山の威容も木々の枝葉に遮られて見えなくなった。

そうした忠長一行を、背後から近く遠く、忠輝軍の将兵が忠長を狙って上げる雄叫びが追ってきた。